

「合気道と私」
——北野高校時代の出会いとその後——

氏名：黒岩 暎一（75期）

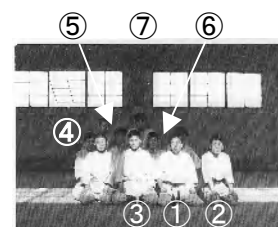
- 0 合気道との出会い
 - 1 大先生（開祖、植芝盛平翁）にお教え頂いたこと
 - 2 目の当たりに見た・聞いた大先生
 - （1）大先生の風貌、日常、稽古時
 - （2）大先生の講話
 - （3）初心者への指導
 - 3 高弟のこと、内弟子のこと、お供のこと
 - 4 植芝吉祥丸若先生のこと
 - 5 大先生と書
- （おわりに）

0 合気道との出会い

北野高校では、確か3年生のときに合気道を阿部先生にお教え頂いた・・・と記憶している。これが合気道との出会いである。

「力ではなく気です」と言われて何とも不思議な思いがした。「バタン、バタン」と派手な音とたてて勇ましい柔道の受身と違って、丸く猫のように音を立てない受身をととてもオモシロイと思った。そして、気が付けば合気道に魅せられていた。熱心に稽古していたと思うが、当時の写真をみると10数名位で稽古していたようだ。女性も数名いた。

<北野高校体育館（柔道道場）【昭和37年頃】>



- | | |
|---|------------|
| ① | 阿部 醒石 先生 |
| ② | 阿部 豊雲 先生 |
| | 〈75期〉 |
| ③ | 久利 修 |
| ④ | 辰巳 勝彦 |
| ⑤ | 黒岩 暎一 |
| ⑥ | 浅野 昌和 |
| ⑦ | 能勢 正則 |
| ⑧ | 八木 汐美 |
| ⑨ | 吉村(中村) 美恵子 |



(同期の辰巳勝彦君は高校以来、合気道を続け医者を作りながら道場を開いていると聞いている。)

当時から合気道部と思い込んでいたが、合気道部のOB名簿をみると正式な合気道部の発足前であったようだ。それでも学校側からきちんと認知された活動であったと思う。なぜなら、文化祭で各クラブ活動のひとつとして「初めての演武」を披露したことを覚えている。

阿部先生が、自宅に合気道場を作られたので、大阪の大学に入学以降は、吹田の道場へ良く通ったものだ。

この吹田の道場で植芝先生に出会った。その姿の存在感、発するオーラにももの凄い衝撃を受けた。そして、幸いなことに当時は初心者ばかりの道場の面々であったが阿部先生ともども植芝先生から直接の指導を受けた。

社会人になってからは、仕事や生活に追われてほとんど合気道に接することは無かった。運動は、仕事の合間にジョギングをする程度のものであったが、幸い健康には恵まれた生活を送っていた。

しかし、還暦を過ぎてから改めて健康の大事さに気づいた。もう一度、合気道をやってみようかと思ったが何十年も離れていてもう遅すぎると一旦は諦めていた。しかし、ぎりぎり間に合うかもしれぬと思い直して、自宅(鎌倉市)に近い大船合気道協会(師範:武田聡七段、合気会)を訪問し、入門(2008年8月)をさせていただいた。

その折、武田聡師範から「自分は、植芝開祖が亡くなられた後に、合気道を始めた。開祖から指導を受けられた人は、もうほとんどいない。今や大変に貴重な経験です。羨ましい。」と言われ、改めて、凄い経験をさせてもらったことに気付かされた。

吹田市の阿部先生の道場で稽古や大先生のお世話をしていたお陰で、開祖から色紙をいただいた。その貴重な色紙は、長い年月を経たために、カビ、シミに襲われてしまっており、もったいない、申し訳ない気持ちです。

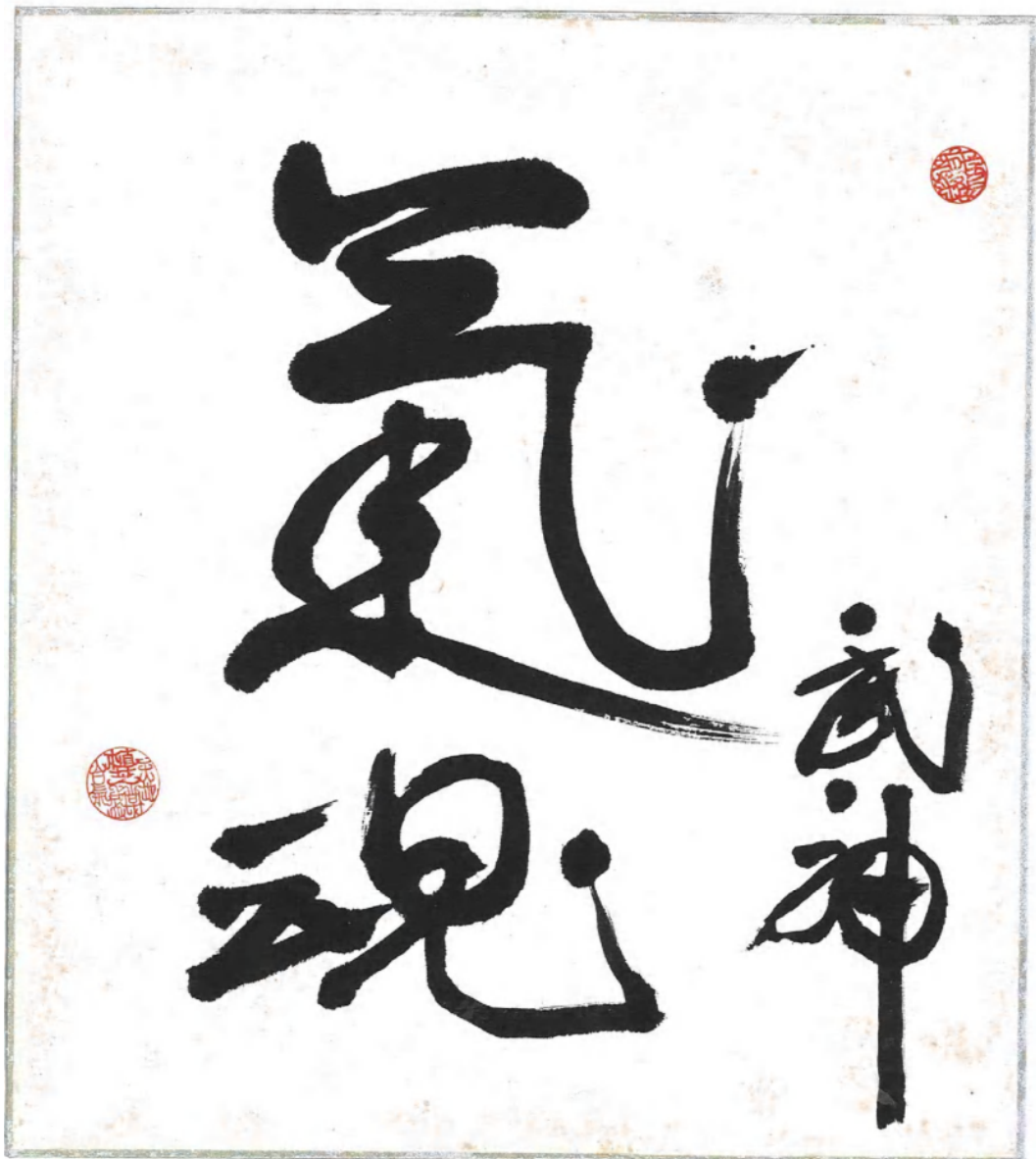
色紙と同じように、開祖にお教え頂いたことをそのまま自分にだけ留めて置けば、そのうち消えてしまいます。

この機会に大先生よりお教えいただいたことを出来るだけまとめておきたいと思った次第です。阿部先生が、開祖に徹底した師への礼を尽くされていたことは強く印象に残っている思い出です。

ただ、当時は初心者ですので理解を超えたこと、記憶誤りがあるかも知れないと思います。これを読まれた方々に訂正を頂ければと思います。

紹介するに当たり次の事に留意しました。

- とにかく目の当たりに見た・聞いた大先生その人を紹介する。
- 大先生の元に集まられていた人達を紹介する。
ー達人、不思議な人達です。その人達を通して知った大先生。
- 道場で初心者へ向けての指導されたことを紹介する。
ー演武の時とは違う指導であった。



(昭和42年頃、大先生より頂いた色紙)

1 大先生（開祖、植芝盛平翁）にお教え頂いたこと

植芝盛平翁は、1883年12月14日和歌山県田辺市に生まれられた。
1969年（昭44年）4月26日死去。享年86歳でした。

①指導時期：1963年（昭和38年）—1968年（昭和43年）3月まで
—亡くなる前の5年間

②場 所：大阪の道場（阿部師範）・・天之武産合気塾
昭和38年道場開き。道場名は大先生が命名。
・昭和27年田中万川道場開き（大阪合気会会長。1988年死去）
・昭和29年引土道雄道場開き（和歌山県新宮市）

③大先生が大阪訪問の背景：

- 大阪、和歌山での合気道の普及のために訪問し滞在。
—（引土道場では1ヶ月位も滞在と聞いた）
- 大本教：京都府綾部、亀岡への訪問の途中で滞在。
- 阿部師範は自宅に隣接して道場を建設。
また、大先生をお迎えするために自宅に部屋を新設されていた。
—（引土師範、阿部師範に対しては特別の思いをもたれていたよう
でした。後年、両師範には十段位を印可されている。）

④滞在時：（内弟子を伴って、宿泊。直接、指導を頂いた）

- 必ず、内弟子あるいは付き人を伴い行動
- 滞在時は、1週間から10日くらい

<道場での合気道指導>

- この滞在期間に道場で大先生から直接指導。
また大先生が所用で不在の時は、内弟子が直接指導。
- この内弟子は圧倒的な強さで、指導は厳しいものでした。
大阪の道場は開設したばかりで、初心者ばかりであったが、この
内弟子にキツイ稽古をしてもらったお陰で、皆、腕が上がったと
思います。
- 当時の我々から見ると物凄い内弟子が、大先生と対すると赤子も
同然で、改めて大先生の凄さを目の当たりにすることができまし
た。

<道場での講話>

- 大先生の滞在を聞きつけた人々が多数来訪（勝手に来た）。
- 「有名な大先生を一目見たい」、「修行のお話を聞きたい」など様々

な思いで集まられた人でした。集まった方々を見るからに只者ではない面々でした。大先生の講話が始まる前に、お互いの雑談を聞いていたが、那智の山伏、相当に実力のある武道家、宗教家などもいました。

—そういう人が良く勝手に集まって来るのを承知の大先生は、夕方の稽古後、集まった人々に講話された。

- ・ 講話内容：大先生の修行時代の内容、古事記の世界、人生訓等。しかし、初心者、若造の当方には極めて高度、難解でした。

⑤お 供：大先生のお供を2回させていただきました。

大本教（亀岡）へお連れする。滞在している大本教（亀岡）から吹田の道場へお連れする。

—本来予定していた人の都合が悪くなり、急に代わりを依頼された。

—途中でいろいろな話をされた。いろいろな出会い・体験があった。

- ・ 只者ではない風貌に、道行く人が皆振り返る
- ・ 大先生を見て、思わず拝む人々
- ・ 大先生は高齢で、駅の階段などを登るのに難儀。（後ろから、押してあげる。）

—大先生のお供をして行動するとそれだけで強くなっていた。

お供をした後で稽古すると、

「物凄く気が出ている、いつもと全く違う。一体どうしたのですか」といわれた。

（「大先生から発する気が移るのだ。皆そうだ」と阿部先生から教わった）

—浅野昌和(75期)君もお供をして、同じ体験をしたと言っていた。

—残念ながら、1週間もすると元に戻る。

⑥出稽古：紹介してもらい本部道場、合気神社、熊本へ。

—吉祥丸本部道場長、齋藤師範（合気神社道場）、砂泊師範（熊本）に教わることができた。

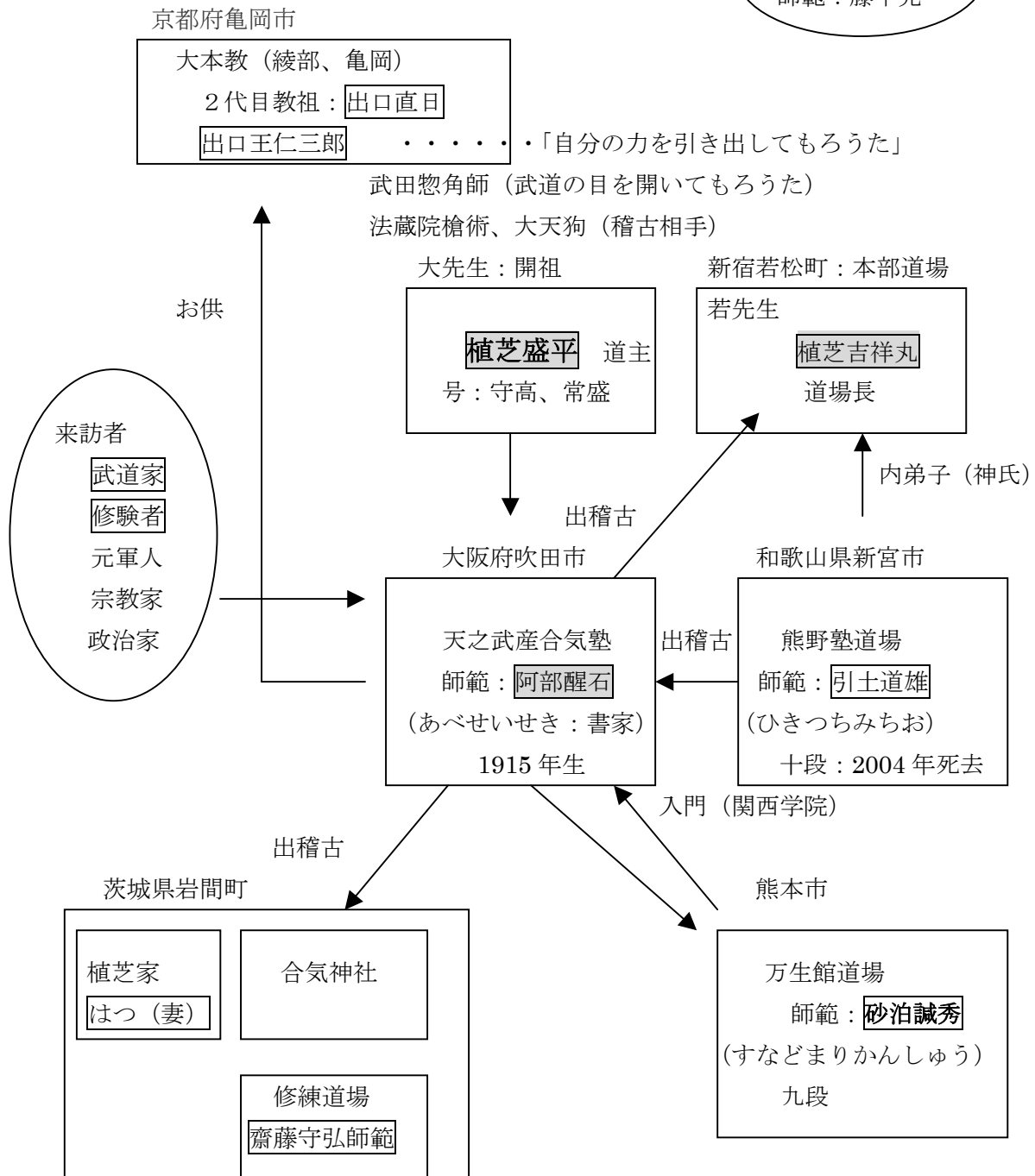
—出稽古すると阿部先生の「気のながれに沿う」自然な柔らかい合気道は特別なものなのだと気が付いた。各道場ごとに特色があり、一様でないことを知った。

—「阿部先生が教えられているので、さすがに、柔らかい（齋藤師範）」と言われた。

40年前に出会った人々

時折、話しに出てきた (当時すでに著名人)

師範：塩田剛三
師範：藤平光一



2 目の当たりに見た・聞いた大先生

(1) 大先生の風貌、日常、稽古時

- 153センチの老人。しかし、見るからに只者ではない風貌、風体。
- なにしろ眼光がすごいし、オーラが物凄い。
- お供をして外出するとすれ違う人が振り返る。(拝む人も)
- 日常、生活の全てが鍛錬の人。

- ①**眼光**：日常（黄色い光）、稽古時（白い光）
－日常と稽古時は別人の眼
- ②**竜眼**：青いリング、（はつ夫人も同じ竜眼）
- ③**声**：朗々として響く。気合は物凄い。
- ④**服装**：羽織、はかま、足袋、下帯。
－稽古のときは必ず足袋。
－常にきちんとされている。一分のスキもない身だしなみ。
－（何時誰に出会っても大丈夫な服装）
- ⑤**階段**：駅の階段（後ろから支えて腰を押す。気の鍛錬と教わった）
－自分で階段を登るのが難儀する。・・稽古時とは別人。
- ⑥**指圧**：背中を指圧するのを喜ばれた。
－（鉄板を指で押す感じ。指が折れ曲がる。常人の背中ではない。
（気の鍛錬になると教わった）
- ⑦**木刀**：毎回持参。手製で削ったのでは？赤い櫛？（酒を飲ませた色）
－光輝くような木刀。演武、稽古の度に使用された。
- ⑧**杖**：毎回持参。
－3回程度しか演武、稽古では使用されなかった。
- ⑨**槍**：持参しないが、講話ではほとんど槍の話。
- ⑩**毎朝**：水垢離、祝詞（のりと）を奏上。その後、稽古、来客、書。
- ⑪**食事**：菜食主義。玄米食。
- ⑫**稽古**：舟こぎ・振魂から。初心者向け。内弟子が受け。
時々、演武（木刀、杖、多数がかり、裂帛の気合、・・・）
- ⑬**8シ**：（見た目には舞う様にゆっくり。映写するとこま落としのよう）
- ⑭**手**：（触れられると、神の手と感じた。不思議な感触。）

(2) 大先生の講話

- 大先生の滞在時には噂を聞いて大勢の人（武道家など）が集まった。
－誰も知らせていないのに勝手に集まる状況（追い返せない）
- 多くは稽古の終わった後に集まった人に話された。
－「多数の人がきておられますが、どうされますか？」
「また、このジイの話を聞きたいんじゃろ・・・」
- また、滞在中、若手を相手に語りかける。
－「若い人と話をすると楽しい」
－生い立ち、修行、大本教、古事記、悟り、世相へのコメント
など様々

<印象に残っている講話より>

- －大先生は大変に多くの事を語られた。
- －残念ながら、初心者でもあったので多くのことは理解を超えていた。
- －それでも合気道の本質のようないくつかの講話は憶えている。

①合気道の極意：「合気の極意は、正勝吾勝勝速日なり」

- 正勝（まさかつ）・・・正しい心の人勝つ
- 吾勝（あかつ）・・・自分に勝てれば他人にも勝てる
- 勝速日（かつはやび）・・・日の速さに勝つ（スピード、怠けない）

②合気道の鍛練：何のために合気をやるのか

「合気は人間を鍛えるものである。眼気作力（がんきさりき）なり」

力：腕力はいくら鍛えても限界がある。無限に大きな腕力などない。

作：腕力を鍛えても作（わざ）を鍛えた人にはヒョイと投げられる
（しかし、作（わざ）は相手と接触していなければかからない）

気：気を鍛えた人は、力を鍛え、作（わざ）を修めた人も離れて
倒すことができる。水火（いき）じゃよ。

眼：しかし、いくら力を鍛え、作（わざ）を修め、気を鍛練しても、
人間（眼）を鍛えた人にはひと睨みで倒されてしまう。

・「わしは、眼で相手を金縛り（術）にできる。」

合気道とは人間を鍛えるためにするものだ。

③修行の相手：人間を相手にするのではない、宇宙を相手にする。

戦うのではなく宇宙と一体になることを修行する。

④古事記：合気道の極意はすべて古事記に出ている。

古事記はいろいろな真理を神の名などに託して示している。
西洋での神の名とは異なる。

●正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命・・・合気道の極意

(まさかつあかつかつはやひあめのおしほみのみこと)

●建御雷神 (たけみかずきのかみ)・・・合気道のワザを実践。

－「其の御手 (みて) をとらしむれば、すなわち立氷 (たちひ) に
取り成し、また剣刃 (つるぎは) に取り成しつ。」

〔建御雷神が手に気をいれたら、まるで氷を掴んでいるようになり、
次に剣の刃のようになったということだ…。〕

－「< (相手の) 手を取れば>、若葦 (わかあし) を取るが如く、
つかみひしぎて (握り潰して)、投げ離つ・・・」

〔気をいれて相手の手を掴み (四教)、投げ飛ばしたということだ…。〕
〔合気道そのものだ…。〕

●太力男命 (たじからおのみこと)

－天岩戸を開いた (物凄い力)

⑤大きな力は誰でも持っている：「火事場のクソ力」と同じ。

－普段は出ない。普段に出せるように鍛練するのが合気道

－自分は若い時代から力だけは誰にも負けなかった。

故郷の田辺の海には、外国から船が来て鯨を獲っていた。

その船が給水に田辺の海に来る。伝馬船に水樽を乗せて沖に停泊
している船に届ける。自分はその水樽をヒョイと持ち上げて船の
上の水夫に受け取るように促すのだが、彼らはその重さに驚いて、
結局、起重機を使って受け取った。

－武道は大東流の武田惣角師 (ヒト技いくらと言われ随分と金を使
った) などに学んでおり、ひとかどの武道家であった折に、出口
王仁三郎師に出会い大本教に入信した。

－そこで自分の持っている本当の力を出口王仁三郎師に引き出して
もらった。(大本教での2つの奇跡)

皆と庭に出ていた時に、出口王仁三郎師から急に声をかけられた。

「植芝さん、植芝さんあなただつたらその松の木を引き抜ける」

「植芝さん、植芝さんあなただつたらその大岩が持ち上がる」

「声をかけられた途端に、体が真っ赤になり物凄い力が湧いてきた。」

「そして松の木が引き抜け、大岩が持ち上げられた」

- 自分では気が付いていなかった力を出口王仁三郎は見抜いていた。
- 大本教を信じている訳ではないが、その恩義があるので、例祭には今でも参っている。
- 「合気の力は地球の引力のような凄い力です。「自然に存在している。」

<バケツ一杯の水でも持つのが大変。
 地球は大きな海の水を支えている。
 その力はどこからくるか。
 地球の中心にある。
 地球の中心には何があるか。
 物質は何も無い。
 何も無いところから引力が生まれている。
 本当は無いのではなく有るのです。(無即有)
 この引力のような力が合気の気である。>

(3) 初心者への指導

- 自ら初心者へ指導された。
 - (一教、二教、三教、四教、四方投げ、入り身転換、天地投げ、小手返し、後ろ取り、呼吸投げなどの基本型。)
- 加えて、次の指導が印象に深い。
 - ①磐石の態勢・・・半身、間合い、磐のように動かない、そして相手の動きに応じる。
 - ②気の入れ方
 - 気が流れることを意識すれば流れる。
 - 気が流れると力をいれずとも曲がらない腕になる。
 - 指先からの気の流れに従って相手も動く。
 - ③曲がるほうに曲げる。合気道には逆手はない。蹴りもない。
 - ④争わないで合わせる
 - ⑤日常で鍛練。鍛と錬がある。
 - ⑥コンクリートの上で投げられたらどうするのだ。(大きな音をたてる受身はダメ)
 - ⑦金縛りの術
 - ⑧剣(線)より槍(点)の武道
 - ⑨片方の手を残さない
 - ⑩天地と和合する、宇宙と和合するつもりでやりなさい
 - ⑪舟こぎ(気を練る:エイホーとエッサ)、振魂(無心になる)

3 高弟のこと、内弟子のこと、お供のこと

塩田剛三・・・高弟（内弟子ではない）

藤平光一・・・高弟

砂泊誠秀・・・叔父、姉ともども師事

（神氏のこと）：：身近な人が内弟子へ

—新宮道場より、出稽古に大阪へ

同年配であるので一緒に稽古

—内弟子になった。半年後に大先生のお供で大阪の道場で再会し稽古。

物凄く、強くなっていた。

「内弟子はどれ位の時間、稽古をしているのか？」

答え：通常の一般稽古とは別に道主・内弟子とで毎日稽古

しかし、15分位。それ以上はできない程の稽古。

「15分の稽古とは？」

答え：上手く口では言えない。

「物凄く、強くなっているのでびっくりした」

答え：「・・・その言葉に驚いている」

「内弟子になって初めて、外部の人と稽古した。

何となく以前の自分と違っていると感じていた。

強くなっていると聞いて嬉しい」

4 植芝吉祥丸若先生のこと

—出稽古で合気会本部道場にて指導を受けた。

・吉祥丸若先生に手を取られると身動きできなかった。

5 大先生と書

—始終、書いておられた。

「書いて伝えておきたい」

—「武神」、「気魂」、「正勝」、「吾勝」、「勝速日」、「慈愛」、「九鬼・・・」

—式段に昇格のときに色紙を頂いた。

「亀岡に随行してもらい世話になった」

(おわりに)

大先生にご指導を頂いた時期は、私は電子工学を専攻する学生であった。通常の意識では、合気道と電子工学とは一見無関係で遠い存在である。そんなこともあって当時の学生仲間からよく質問された。

●「熱心に合気道をしているが、合気道と柔道とは何がちがうのだ？」

—この質問には次のように答えると納得してくれた。

○「柔道はニュートン力学の世界、それに対して合気道は量子力学の世界だ」

.....

柔 道	合気道
創始者：嘉納治五郎	開祖：植芝盛平
科学的 哲学的	神秘 宗教的
柔よく剛を制す 相手の力を利用する	相手と和す 気を和す
力を鍛える	(既に持っている) 気を引き出す
相手と接しての技	離れている相手への技 (気)
目に見える 頭で理解できる	目に見えない 頭での理解を超える
ニュートン力学的	量子力学的

以 上